

ペン俳句会 句会報(三二四号)

令和二年十一月五日

囑目、明治神宮にて吟行を行う。

森田 元斐

寄せられし菰樽重ね神の秋
百年の佳き日雲なし秋の色
大木の空を狭めて秋の声

宮原 ユリ

神宮の杉の木立や秋高し
神苑に秋の深まり樹々しずか
虫喰ひの葉脈透かし秋日差す

首藤 しずを

百年祭秋陽に巫女の緋色燃え
菊の香や披講の声の天に抜け
階に耀ふ桜落葉かな

志村 良知

菊列す宮居百年寿ぎて
広場静か雑木紅葉は照り染めり
银杏落葉少女モデルは決めポーズ

大津 そうかい

池の面に色極めたる紅葉かな
清正の井戸こんこんと秋気満つ
響せる小鳥の杜や神の杜

安藤 晃二

華麗なる紅葉より垂る蜘蛛の糸
青竹の手水の音や秋の昼
楠の護る銅屋根の宮秋高し

斉藤 まさお

大菊や色とりどりの宇宙人
どんぐりを踏みて深閑神の森
菊日和しばし明治の心地かな

長尾 進一郎

七五三の子らの小ささや大社殿
神の棲む森を隣に主都の秋
絵馬に込めし思ひ重なる秋日和

中村 晃也

参道に菰被せたる新走
参道に秋日漏れ来る佳き日かな
百年の神宮の杜秋日濃し

内藤 まりこ

秋空を突く百年の大鳥居
天高し神宮の森しんと
大輪の菊花並びて背比べ

新田 ゆふき

秋澄むやカラスの見上ぐへリコプター
秋の日の清正の井戸満ちてをり
玉砂利に心鎮もる秋日和

高橋 由紀子

世を祈るみ社鷹の舞い下りぬ
明け行く世見尽くしてなほ裏紅葉
ぼっくりの音もたどたどし七五三

十二月の兼題は「霜」

昨今、冬の季語はなかなか難しくなっている。地球温暖化の影響は大きい。土の道も少なくなつてしまつたし、悴むという感覚も薄れているからこそ、自分の感覚を研ぎ澄まして寒さの体感を匂にしていくなことが求められている。

兼題を膨らませて霜のつく季語を並べると、

時候に「霜月」これは陰曆十一月の異称（陽曆の十二月前後）。「霜夜」朝方には霜が降りるような空気の澄んだ身を切るような寒い夜。

磧ゆくわれに霜夜の神楽かな

飯田蛇笏

霜夜なり鶴女房の機の音

蓬田節子

天文の候に「初霜」「霜」

初霜や物干竿の節の上

永井荷風

初霜や千本の糸染め上がり

水田光雄

南天をこぼさぬ霜の静かさよ

正岡子規

強霜の富士や力を裾までも

飯田龍太

地理の候に「霜柱」

霜柱顔触るるまで見て佳しや

橋本多佳子

霜柱俳句は切字響きけり

石田波郷

生活の候に「霜除」「霜焼」

霜除のその勢ひのくくり縄

高浜虚子

霜除や月より冴ゆるオリオン座

渡辺水巴

京も終（はて）霜やけ薬貝に盛る

石橋秀野

霜焼けの双手を出して抱けとこそ

白石多恵子

読んでいるだけでも寒さをひしひしと感じる。霜の句は寒さが眼目である。

西川 知世